

連載

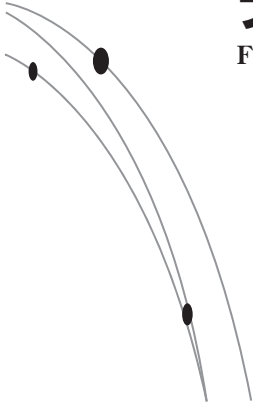
フィールド・アイ

Field Eye

サンディエゴにて——①

阿部 正浩

Masahiro Abe



青い海に青い空、そしてバラ色のライフガード

青い海に青い空、そしてきらきら輝く太陽。3月下旬だというのに日本の初夏のような気候。飛行機から降りると少し汗ばむくらい。これから1年間の在外研究のため、大震災直後の日本を後にサンディエゴに降り立った。

私を訪問研究者として受け入れてくれたのは、カリフォルニア大学サンディエゴ校 (UC San Diego) の星岳雄さんだ。星さんとは10年ほど前からJILPT (労働政策研究・研修機構) の「企業のコーポレートガバナンス・CSR と人事戦略に関する調査」などでご一緒しており、こちらでも共同研究することになっている。

UC San Diego は、サンディエゴのダウンタウンの北に10マイルほど行ったところにある。自動車では20分くらいだ。キャンパスはかなり広く、2040 エーカー (約8.26km²) ほどあり、東京都国立市と同程度の面積だ。ちなみに日本で最も広い単一キャンパスは広島大学の東広島キャンパスだそうで、2.52km²ある。

これだけキャンパスが広いと徒歩での移動は大変だ。そこで、キャンパス内にはUCSDの文字が大きく車体に描かれた大学が独自に走らせるバスが行き来し、我々の移動を助けてくれている。

しかし、日本では信じられないことだが、ドライバーは学生アルバイトだ。もちろん、プロのドライバーもいないわけではないが、相当数の学生アルバイトがバスを運転している。バスの車内にはアルバイト募集の張り紙がいつも貼ってあり、時給は12ドル程だという。夏休みの間にトレーニングを受けて、学生

もドライバーとしてアルバイト勤務に就けるようだ。

自宅からの通勤でもこのバスを使うことがよくあり、学生の運転するバスに乗る機会も多かった。ただ、プロのドライバーに比べると学生アルバイトの運転はとんでもなく下手くそで、急ブレーキと急発進の繰り返しだ。座席に座っていても体を大きく揺すられる。学生アルバイトの活用で、乗り心地を犠牲にしてもバスの運営コストが低減でき、大学にとってはメリットが大きいのだろう。

私のオフィスは国際関係・環太平洋研究大学院 (School of International Relations and Pacific Studies, IR/PS) の中にある。キャンパスの北西側にあり、海からも近い。海外までは歩いて15分程度だ。私のオフィスからもきらきら輝く太平洋がちらっと見える。ウェットスーツを着てサーフボードを持って歩いている学生や教員がキャンパス内でもいる。水着なのか下着なのか分からない服を着て、授業を受けている学生もいる。教室の椅子の下には水たまりが出来ているときもあった。こっちの人たちは時間の使い分けが上手いなあと妙に関心をしたこともしばしばあった。社員を留学させている日本企業の中には、UC San Diegoに留学させると遊んでしまうという危惧を持つ企業が多いそうだ。サーフィンが上手になる留学生がいるのも事実だが、基本的にはまじめに勉強している。私も時間の使い方が上手かったら、サーフィンを覚えられたかもしれない。

海沿いをぶらぶら歩くと、ライフガードが詰めるタワーが要所要所に見える。このタワーには1年を通してライフガードが詰めている。海がいつでも温暖ということではないが、四季を通して水泳やサーフィンに興じる人たちがおり、監視が必要なのだろう。

ところで、このライフガード達の一部はれっきとした市の公務員である。彼・彼女らが公務員だと私が知ることになったのは、政府の財政危機との関連で何度か話題として取り上げられていたからだ。

カリフォルニア州政府の危機的な財政状況をご存じの方も多いただろう。そのため、財政支出の削減と同時に公務員の報酬削減も政策課題としてマスコミなどでしばしば取り上げられる。そんな中、あるテレビ局が取り上げたのが、ロサンゼルス郊外にあって高級住宅地を抱えるCity of Newport Beachの公務員ライフガードの高額な報酬だった。それによると、Newport Beachで監視業務にあたる13名のフルタイムの公務

員ライフガードのうち、少なくとも二人は年収が20万ドル（日本円で約1600万円）を超えており、最低でも9万8千ドルの年収を得ているという。実際、市が議会に報告している資料でも、ライフガードの基本給は5万8千ドルから10万8千ドルまでのレンジがあり、これに特別手当や残業手当、医療保険、生命保険、年金などが報酬として加わると記されている。特別手当のなかには400ドルの日焼け手当なるものが含まれており、摩訶不思議な名称の手当は日本だけにあるのではなかったらしい。

一方、ホテルやテーマパークなどの民間企業もプールなどを監視するためにライフガードを雇うことがあるが、その大部分がパートタイマーであることも関係して、彼・彼女らの平均的な年間報酬は2万3千ドルほどとなっている。日焼け手当などが支給されないのはもちろんだ。また、人命救助という意味では同様の仕事を行っている消防士の年収は、City of Newport Beachでも平均7万ドル前後（日本円で600万円）であり、公務員ライフガードの報酬がべらぼうに高いといっても良いだろう。

当然ながら、Newport Beach市民の間でも公務員ライフガードの待遇に対する評判はまったく良くない。さらに評判を落としているのは、同市の公務員ライフガードの平均引退年齢が50歳であり、引退後も現役時代の90%程度を年金として受け取っているという事実だ。30年間をライフガードとして勤め上げれば毎年18万ドルの年金を受け取れるのであるから、残りの人生はバラ色だ。

では、公務員ライフガードの報酬がこれだけ高水準なのはなぜなのだろうか。

まずはCity of Newport Beachのライフガードの言い分を聞いてみよう。まず、20万ドルの報酬を得られる層は水難監視業務を行うライフガード達を管理する者であり、管理監督的業務を行う者達だ。だから、“一般の”ライフガードとは違うというのだ。

また、一般のライフガードの中にはパートタイムのライフガードがいて、ボランティアのライフガードもいる。こうした一般のライフガードの技術や技能を向上させるための訓練（受講者が費用を負担）を実施するのも公務員ライフガードの仕事の一部だ。さらに、彼らは水難事故を未然に防ぐための市民向けの

講習会も多数行っている。こうした訓練や講習などでNewport Beachの公務員ライフガードは年間100万ドル以上の収入を同市にもたらしており、20万ドルの報酬ももらいすぎではないというのも彼らの主張だ。

さらに、アメリカの公務員ライフガードは、市によっても異なるが、日本の警察官のような法執行官も兼ねるCity of San Diegoのケースや、パラメディック資格が必要なLos Angeles Countyのケースなど、業務遂行のために必要とされる技能や知識が格段に広い。しかし、そのための教育訓練費用の大部分は本人負担であり、それも高額の報酬につながっているようだ。

官民の報酬格差や年金格差は日本でもしばしば取り上げられる。しかし、カリフォルニアほどではない。と言うよりも、そもそも日本にはそれを生業としているライフセイバーがいない。日本ライフセイビング協会によれば、一部の市町村では夏期の間だけ海岸やプールなどの救命監視活動を地元のライフセイビングクラブが協定などを結んで有給で行っているケースもあるが、地元のクラブがボランティアで活動することのほうが多いとのことだ。有給だとしてもその報酬はたかがしれている。もちろん日焼け手当などは出ていない。協会の方にカリフォルニアには年収20万ドルのライフセイバーがいると話をしたら、非常に驚かされていた。

ところで、UC San Diegoにはキャンパスの一部として利用している美しい海岸があるが、昨今のCity of San Diegoの財政再建の一環で、ライフガードの人数が減らされていた。最近になって、この海岸でのライフガードサービスを維持するため、大学側もそのコストを負担することに市当局と合意したようだ。その額は年間で約52万ドル。

ライフガードの報酬が高いかどうか、まだ結論は出ていない。

今日もカリフォルニアの空は青く、海はきらきら輝いていることだろう。

あべ・まさひろ 獨協大学経済学部教授。最近の主な著書に「雇用ポートフォリオの規定要因」『日本労働研究雑誌』No.610, 2011年。労働経済学・経済政策専攻。